



北海道バスケットボール協会  
指導者育成専門委員会  
2015/11/12(木)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 174

## 『第45回全国中学校バスケットボール大会(男子)を観戦して』

石狩市立樽川中学校 野崎 師靖

高橋和也先生の全国大会観戦記に続き、私は男子のゲームを中心にその一端をご報告させていただきます。

### 1. 全国大会でも話題に上がった東海大四中等部の活躍

中体連北海道大会、男子6連覇を遂げた東海大学第四高等学校中等部。チームスタート時の部員はわずか5人。このような状況の中、選手を育成しチームを作り上げた嶋村先生をはじめ、その他すべての関係者に改めて敬意を表します。

全国大会でも少ない人数で健闘し、惜しくも延長の末敗れベスト4を逃した東海大四中の戦いぶりは、大会本部でも度々話題に上がるほどでした。それは、人数の少なさや、僅差の結果の敗退という記録にあらわれるものだけではありません。ひたむきにボールを追いかける姿勢であり、ルーズボールやリバウンドの強さ・巧さの部分でした。

新チーム立ち上がりの頃より感じていたことですが、東海大四中の特徴の一つにルーズボールの強さと巧さがあると思います。ルーズボールを奪取する強さを身に付けたチームは数多くありますが、奪取したボールをコントロールし、瞬く間に次の展開へと移行させる巧さを兼ね備えたチームというのは、あまり記憶にありません。同様のことは、リバウンド争いの場面でも度々見られました。相手選手・相手チームからすると、態勢を崩しながらも必死に追いかけたボールが、気がつけば奪われているどころか、しっかりとコントロールされた状況で速攻やシュートチャンスになっているのですから、防ぎようがありません。卓越したボールコントロールのスキル、フィジメカル面での強さとゲームを通して徹底するメンタリティーのタフさ、一つのボールをチーム一丸となって追いかけるチームワークとそのスタイル。これらが、全国の舞台でも遺憾なく発揮されていました。

仮に、選手層に厚みがあれば、予選リーグ2試合目となる岩成台中（東海ブロック：愛知県）戦も、前半のリードを保ったまま勝利を収めていたかもしれません。また、ベスト4をかけた別府北部中（九州ブロック：大分県）との試合も、延長に入らずとも、仮に入っていたとしても、結果は違ったものになっていたかもしれません。

奇しくも全国大会で東海大四中が敗北を喫したこの2チームは、ともに全国第3位という成績を収めています。このような点からも、東海大四中の実力は間違いなく全国レベルであったということが言えると思います。

### 2. 北海道の強さを見せつけた札幌中の活躍

もう一つの北海道代表として出場したのが札幌中でした。道内の大会では、東海大四中にあと一步！という戦いを度々演じていました。

全国大会までどのようにチームをレベルアップさせ、成長を遂げているのかがとて

も楽しみでした。

結果は、予選リーグを見事に突破し、決勝トーナメント進出という素晴らしい成績です。北海道カップ参加の本州のあるコーチは、札幌中の活躍ぶりに「ずいぶん強くなったんじゃない!？」ですとか「いいチームになりましたね!」などというお話をされていました。競先生を筆頭に、昨年女子チームを全国大会に出場させた和田先生の経験や、4月から赴任された田中先生の豊富なキャリアが上手にマッチングし、まさにトロイカ体制の成果があらわれたのだと思います。全国の強豪と互角に勝負する様子に、北海道の強さを見せつけてくれました。

ただ、私が最も印象的に感じましたのは、札幌中の生徒もスタッフも、「勝負をしに来ている」という点です。全国大会出場がゴールではなく「いかにして勝つか!」をチーム一丸となって掲げて「真剣勝負をしに来ている」という点です。過去には、“夢の舞台全中”がチームのゴールであり、表面上の目標や言葉とは裏腹に、やはり、真剣勝負に徹しきれていないチームもありました。

このような現状から、北海道のチームは、全国上位を狙うに十分なレベルに位置していると言えます。しかし、大前提となるのは、そこを狙う意識にあると思います。チームの目標をどこに置くか?ではないでしょうか。

今年の新人大会から東海大四中の姿はありません。間違いなくこれまでは、「打倒、東海」が一つの目標になっていました。これが道内のレベルを上げていた事実は否めません。しかし、これからは違います。

札幌中の活躍ぶりに、このようなこともふと、感じたりもしました。

### 3. 決勝を終えて

今年度の全国大会は、関東ブロック：東京都代表 実践学園が優勝しました。決勝戦は近年稀に見る好ゲームでした。高さの実践学園、速さの玉島北（中国ブロック：岡山県）という、特徴的なカラーを持つチームの対戦となりました。大方の予想では、優勝候補は玉島北だったようです。3月に行われました都道府県対抗ジュニアオールスターで優勝したメンバーが中心でしたから、当然かもしれません。

しかし決勝戦は、実践学園の執拗なリバウンド攻勢とゴール下の強さが勝負を決めました。ボックスアウトに負けない強いオフENSリバウンドでゴール下シュートを決め、例えボールを奪うことができなくとも、それがそのまま玉島北のファースブレイクのタイミングをずらすプレッシャーディフェンスとなり、自陣では相手に隙を与えない強固なディフェンスリバウンドとなりました。両チームのスターティングラインナップ（玉島北：173、171、171、170、178、実践学園：185、180、174、165、186）を比較すると、やむを得ない状況もありますが、そこを割り引いてもゴール下の強さが際立った実践学園の戦いぶりでした。相手の長所を封じ込めた、強さの勝利でした。

実践学園#4キャプテンは、その体格を活かしたプレーで身体を張り、相手とのコンタクトを恐れず、果敢にゴール下へと飛び込み、パワープレーやリバウンド、バスケットカウント、フリースロー、というかたちで幾度となく傾きかけたゲームの流れをチームに呼び戻していました。後半の立ち上がり、玉島北が持ち味を発揮し、この試合最大10点のリードを奪いました。が、再び土俵中央へ勝負を戻し、第4Qの勝負を決めるラストショットも、実践学園#4のポストプレー、パワープレーでした。玉島北の速さを封じた実践学園の強さが勝利の最大要因ではなかったかと思えます。

毎年のことですが、強い、速い（早い）、巧いと言っても、全国大会に出場するチーム・選手を見ていると、基準が一つも二つも違うことに驚かされます。このようなことこそが、実際に目の当たりにしなければわからないものと言うのかもしれませんが。百聞は一見にしかず、全国大会の会場で直に試合をご覧になることをお勧めします。

#### 4. おわりに

来年の全国大会は福井県です。また、マンツーマン・ディフェンス推進（＝ゾーン禁止）が4月から正式に実施される見通しです。これまで以上のフィジカル、メンタルの強さが求められるかもしれません。

- ・暑さに負けない
- ・タフな1：1（スピード、パワー、高さ）に負けない

ということは大前提だと思います。

ジュニア連盟発足を契機に、着実に全国との差を埋めてきた成果は記録にも記憶にも刻み続けてこられました。悲願の日本一もそう遠くはないという感触はあります。連盟発足当時の理念の通り、指導者同士の仲の良さと、夢を追いかける飽くなきチャレンジング・スピリッツを北海道の武器として、お互い頑張っていきましょう！